

現代中国地方都市における 親の教育ストレスに関する研究

—湖北省黄冈市における質問紙調査に基づいて—

陳 鳳

1. はじめに

改革開放政策以降、中国の経済は著しく発展してきた。それに伴い、経済格差も徐々に拡大し、農村の貧困問題、「城郷二次元発展問題」、教育不公平といった社会問題も顕在化してきた。学歴インフレと就職難が生じ、階層が固定化し、教育を通じた階層移動及び社会的地位上昇を実現するのは難しくなってきたことを人々が実感した。一方、子ども問題として、いじめや犯罪など青少年の心理的な要因から起こる問題行動や犯罪問題も激化されたとマスコミも取り上げている。そこで本研究では階層に着目し、親の教育ストレスの実態と要因を明らかにし、親の教育ストレス・階層と子どものソーシャルスキルとの関連を明らかにすることを目的とする。中国の中での「中間層の親の教育ストレスが大きい」という言説を実証調査で検証したい。

階層と家庭教育にかかわる先行研究において、日本でも、中国でも、階層による家庭教育の差異があることが指摘されている。親の学歴、収入、職業といった家庭背景がいかにより子どもの教育達成や社会地位に及ぼすかという再生産のメカニズムを解明することが多い。中国の研究対象は下層の「農民や農民工」に、より注目されている。また中国の親の教育ストレスの先行研究を整理する時、マスコミは中間層の親の教育ストレスに注目し、中間層の親の教育ストレスが最も高いという見方もある。他方、家庭教育と階層に関わる先行研究の中で、下層の人の教育達成欲求の強さと階層移動の困難が分かった。この矛盾した見方の中で、中間層の親の教育ストレスが高いかあるいは下層の親の教育ストレスが高いかということを実証調査で明らかにしたい。

2. 調査概要と親子の教育実態

中国湖北省黄冈市黄州区における 13 校の高校の中から 4 校を抽出し、2017 年 4 月から 5 月にかけて、2 年生と保護者を対象として質問紙調査を行った。保護者と高校生票ともに 495 票を配付し、保護者票は 411 票、高校生は 447 票の有効回収票であった。

属性と教育実態について、子どもの性別による差が見られる。女子に対しては学校外投資が多く、経済的理由でやめたことが少ないということから、男子ほど経済的な要因の影響を受けておらず、厳しいきっちりした教育が行われている。また親の学歴、職業階層が高いほど、より熱心に教育する親が多い傾向である。階層移動と教育実態について、「固定化下層」は子どもの校外教育をやめたり、数を制限したり、習い始める時期を遅らせたりするという傾向が見られる。また「新規中間層」は「再生産中間層」より、子どもの教育達成の意欲がより強い。

3. 親の教育ストレスと階層

中国の百度百科「教育焦慮症状」と島津らが作った「職場ストレスサー・ストレス反応尺度」(島津明人他, 2001「職場ストレスサー・ストレス反応尺度」吉田富二雄編『心理測定尺度集Ⅱ』サイエンス社, 311-319)を参考にし、教育ストレス尺度を作成した。尺度の有効性を判定するために、信頼性分析と相関

分析を行った。14項目からなる尺度であったが、相関分析の結果、4項目と相関が見られなかった1項目を外し、13項目を「教育ストレス尺度」として分析に用いた(cronbachのアルファ係数、0.813)。教育ストレスと教育実態との関連について、塾や習い事をやめた理由と教育ストレスには関連が見られるが、ほかの項目とは関連が見られなかった。教育ストレス高群には経済の厳しさと受験を準備したいという理由で塾や習い事をやめた親が多い。親の教育ストレスは親の学歴、職業などに関係なく、家庭の年収のみに影響を与えられている。家庭年収が低い父親は教育ストレスが高い。また上の世代の職業を合わせた階層分類は、母親において教育ストレスとの関係が見られる。最も教育ストレスが大きいのは固定化下層の母親である。さらに中国で言われている「中間層の親は教育ストレスが大きい」という言説については、今回の調査結果はそれを裏づけることができなかった。

4. 高校生から見た親のストレスと高校生のソーシャルスキル

本研究では用いたのは木村らが相川らの尺度を発展させ、宮城県の高校生を対象にし、調査を行った尺度である。(木村邦博編, 2014『変動期における高校生の社会的態度・スキルの形成』東北大学教育文化研究会) 7次元の有効性を判定するために、7次元それぞれの項目得点を足し、信頼性分析を行った。7次元の信頼性分析を行った結果では「主張性」「基本マナー」の α 係数はそれぞれ0.104、0.338で、低いため、尺度として使わない。

木村らの東北での調査結果に比べ、中国の高校生の平均得点は「感情統制」以外は日本の高校生より低い。子どものソーシャルスキルと親の階層との関連について、女子では関連が見られず、男子では「関係開始」「感情統制」「関係維持」といった3つのスキルは親の階層との関連が見られる。学歴や職業階層が高い親を持つ男子のソーシャルスキルが高い傾向が読み取れる。

高校生から見た親の教育ストレスは親の学歴及び職業との関連が見られなかった。女子から見た親の教育ストレスは高校生のソーシャルスキルと関連が見られず、一方男子から見た親の教育ストレスは高校生の「記号化」スキルとの関連が見られる。男子から見た教育ストレスが低い親において、記号化スキルが低い傾向が見られる。

5. 結論

親の社会経済的な階層が高いほど、子どもの学校外教育投資が多く、子どもの教育達成という点で有利な地位に立っている。さらに男子のソーシャルスキルも高いということが読み取れる。親の教育ストレスについて、「中間層の親の教育ストレスが高い」という言説を裏づける結果は得られなかった。逆に、「最も教育ストレスが高いのは下層の母親である」という結果であった。「中間層の親の教育ストレスが高い」のようなデータも根拠もない言説が流布されることで事実は見えにくくなり、実に危ない言説に思えてならない。本研究はその見落としした事実を拾い出し、「和諧社会」を目指す中国で現在進行中の「民生改革」に実効ある対策の導入にあたって根拠を提示する上で一定の貢献をなしたと考えられる。本論文には調査地域の単一性と対象者の階層の単純さという限界がある。調査地域及び階層をより拡大することが期待される。

(指導教員 山根真理)